

かる子ちゃん

(一)



桜
田
佐^{なま}

あかちゃんが生まれました。あかちゃんがおにいさんもおねえさんも大喜びです。ところがこのあかちゃんはとてもか弱いあかちゃんでした。だっこしてみると、まるで紙ふうせんか、うわでもだいていっているようにか弱いんです。

「わあ、か弱い！」

とおにいさんが言いました。

「なんてか弱いあかちゃんでしょう。」

とおねえさんが言いました。

そこで、このあかちゃんに、かる子ちゃんという名まえがつけました。か弱い、か弱い、かる子ちゃんです。しかしかる子ちゃんは、からだがか弱いだけで、そのほかのことでは、よそのあかちゃんと同じとも違います。目もありません。鼻もありません。口もありません。耳もありません。手もありません。足^{あし}もありません。

かる子ちゃんはおかあさんにだかれて、おかあさんのおちちをおいしそうに、ちゅうちゅうとすいました。そして、だんだん大きくなりました。笑うようになりました。はいはいができるようになりました。あんよはともじょうずです。からだがか弱いからでしょうね。

おねえさんが、ときどきかる子ちゃんをおんぶして、おもりをします。

「ねんねんようー おころりよー……………」

ところがかる子ちゃんがねむってしまうと、かる子ちゃんがあんまりかるいので、おねえさんは、かる子ちゃんがせなかにいることを忘れてしまいます。

「あれ、かる子ちゃん、どこへ行ったかしら。おかあさん、たいへんよ。かる子ちゃんがいなくなったの。」

するとおかあさんは、にこにこ笑いながら、

「おんぶしているじゃありませんか。せなかにいますよ。」

と言います。

おねえさんはうしろを見て、

「あら、そうだわ、あんまりかるいんで、おんぶしてることを忘れていたわ。」

かる子ちゃんは、大きくなってもやっぱりかるかったのです。

かる子ちゃんは外がすぎです。お花がすぎです。小鳥がすぎです。桜の花が風に吹かれて、ヒラヒラヒラ、ヒラヒラヒラと散って、お池にふわっと浮かぶと、かる子ちゃんもお池の上のっかりたくなります。でも、お池の水の上のっかったら、やっぱりしずんでしまうでしょうね。

小鳥がお池のそばにとんできて、お池の水をチュチュッと飲んで、パツととんで行くと、かる子ちゃんもいっしょにとんで行きたくになります。けれど、ねがないんですもの、いくらかるくてもとんで行くことはできません。

かる子ちゃんのこわいのは風です。よその子どもよりもかるい

から、風がピューッと吹いてくると、からだごとぼされそうになります。

「かる子ちゃん、今日は風がつよいから、そとへ出ちゃだめよ。とぼされたいへんですものね。」

と、おかあさんが言いました。

小鳥たちは、はじめのうちは、お池の水を飲みにきても、かる子ちゃんがそばに行くとおパツととびたつてしまいましたが、だんだんに、かる子ちゃんの友だちになりました。

お池のまわりにはいろんな鳥がきます。

ビービービービー

チュンチュンチュンチュン

ピーチク ピーチク ピーチク ピーチク

クルクルクルクルクルクル

ポッポッポッポ

ビッグル ビーグル ビーグル

チチチッ チチチッ チチチッ

ケキヨ ケキヨ ケキヨ

とてもにぎやかです。

かる子ちゃんはいつも小鳥たちといっしょにいるので、だんだん、小鳥たちのお話がわかるようになります。

かる子ちゃんのおにいさんは木のぼりがじょうずです。

「かる子ちゃん、のぼつてごらんよ。よく見えるよ。」

「わたし、木のぼりなんてできないわ。」

「だいじょうぶだよ、ほら、ぼくのようにやって。」

と、おにいさんは木のぼりをおしえてくれました。かる子ちゃんは、すぐにおぼえてしまって、おにいさんよりもっと早く、もつとじょうずに、もつと上までいかれるようになりました。

おにいさんが、よいしょ、よいしょ、よいしょ、よいしょ、と、ひたいからポタポタポタ汗をたらしてのぼっていきかいだに、かる子ちゃんは、すつすつすつすつとのぼっていきます。どうしておにいさんより早くて、じょうずに、高いところまでいられるんでしょう？ からだがかるいからですね。

「かる子ちゃん、あぶないからそこより上へいってはだめだよ。そこにいると、遠くがよく見えるだろう？」

ほんとは遠くのほうまでよく見えます。

となりのおうちも、そのとなりのおうちも。やねがたくさんつづいて、その先にはみどりのはたけがずーっとひろがっています。遠くの森も見えます。そして、むこうのほうに、お山がともきれいです。

なんていいけしきでしょう。

それからはかる子ちゃんは毎日毎日本のぼりをしました。

かる子ちゃんはいろいろの木にのぼりました。でも、一ばんすきなのは、お庭のすみにある大きな桜の木です。この木には、たくさんの小鳥たちがとまりにきます。かる子ちゃんは木の枝にこ

しかけて、小鳥たちとお話をしました。

「つばめさん、おはよう。」

「かる子ちゃん、こんにちは。」

「つばめさん、どこから来たんですか。」

「遠い南の国からですよ。」

小鳥の中には、この桜の木に巣をこしらえている鳥もいます。

「かる子ちゃん、うちにあかちゃんが生まれましたよ。見にいらいっしやい。」

そこでかる子ちゃんは、また、すつすつとあがつて、あかちゃんのをばにいきました。たまごから生まれたばかりの、かわいかわいあかちゃんです。大きな口をあけて、ビヤビヤビヤビヤとなっています。おとうさんがえさをとってきては、その大きな口の中に入れてやりました。

小鳥がかる子ちゃんに言いました。

「かる子ちゃん、かる子ちゃん、もつと上へいきませんか。」

「上へいったら、枝が折れやしないかしら。」

「だいじょうぶですよ。あがつてごらんなさい。」

そこでかる子ちゃんは、また、すつすつと、のぼりました。

一ばん上までいきましたけど、枝は折れませんでした。かる子ちゃんのはかるいんですものね。それからは、かる子ちゃんは、いつも木の一ばん高い枝の上へのぼることにしました。そこから、とてもけしきがよくて、遠くの遠くの遠くのほうまで、よー

く見えます。でも雨の降る日はからだがぬれるし、かぜをひくといけないから、のぼりませんでした。また風のつよい日も、吹きとばされるとたいへんですから、おうちの中に、じっとしていました。

ある日、とてもいい天気でしたから、かる子ちゃんは一ばん大きな桜の木さくらの、一ばん上までのぼって、けしきを眺めたり、小鳥たちと話をしたりしていました。

ところが、にわか風がビューッと吹いてきました。さあ、たいへんです。小鳥たちは、あわててとんでいってしまいました。かる子ちゃんはおりようとしてましたが、もう枝の先はあっちへまがり、こっちへまがり、とてもあぶなくて、おりられませんか。そのうち風はますますよく吹きだしました。サーッサーッ、ゴッゴッ。

木の枝はぐーい、ぐーい、と、ゆれます。かる子ちゃんは一生けんめい枝につかまっています。サーッサーッ、ゴッゴッ、と、風が吹きます。ぐーい、ぐーい、と、枝がゆれます。かる子ちゃんはしっかり枝につかまっていますが、もうじき吹きとばされそうです。サーッサーッ、ゴッゴッ、ぐーい、ぐーい、ぐーい、ぐーい、かる子ちゃんはどうなるでしょう。

及川ふみ

筆者 桜田佐先生はその昔、東大学生時代より幼きものへのお話や、劇をたくさんおつくり下さったかたです。

みなさんに親しんでいただいています、日本幼稚園協会編の「幼稚園お話集」のなかの ポコポコ 大きな球のはなし 猫のお見舞などの創作者でいらっしやいます。

長身 色白 めがねをかけた角帽の大学生が、ときどき本郷の湯島通りの付属幼稚園の門をくぐっては、おもしろいお話のおみやげをいろいろともってきて下さるのを子どもたちといっしょによろこびむかえたものでした。

震災後もバラック建の殺風景な幼稚園に、お話や、人形芝居などでうるおいをつけてくださいました。

その後先生はフランスに留学されました。お別れに麻布富士見町のお宅にうかがって、お母様の節弥夫人に御接待をうけたことが思い出されます。

がそれ以来ようとして先生の話は絶えていました。ところが今年の一月に突然のお電話、つづいて御来訪をうけて、近著書き下し長篇童話「こどもの朝」をいただいたのでした。

その晩私はこれを面白くよみつけました。そして、そこに、ポコポコ調や、猫のお見舞の妙味を、この「こどもの朝」でも味わうことができたことをよろこびました。やっぱり、桜田先生のお人柄がやくじよとしていたのです。小学生や、お母さんたちにもよんでもらって、こどものかをりを満きつしてもらいたいものです。